
とある侍女の独白ーReverseー

宵月 璃湫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある侍女の独白―Reverse I

【Nコード】

N4072T

【作者名】

宵月 璃渥

【あらすじ】

とある侍女の独白。の、小話を集めた短編集的なものです。優秀な第一侍女（でも自分のことには鈍ちん）と、勇猛果敢だけど少しへたれな陛下、四人の異世界から召喚された勇者（なんちゃって不良、可愛い系だけどやれる子、辛辣毒舌どS君、無口なオトメン？）彼らを取り巻く日常の独白をご覧あれ。

気まぐれ更新です。

侍女の独白（招待状1）

皆さんこんにちは。

私はラシエル・クリオリエ。敬愛する姫様にお仕えしている優秀な第一の侍女です。

優秀な、というのは重要ですからね？

また独白？

もしや味を占めてきたんじゃないでしょうね？と思われたかた……私の気持ちを察してくれば分かるはずですよ。

というか、分かりなさい。私は、姫様の第一侍女として精神誠意を尽くしてお仕えしてきました。

しかし、最近では姫様の他に管理……いえ、お仕えしなければならなかったができたのです。

四人の勇者様

分かっておりますよね？

今や彼らは有名人ですから。

神の託宣により、禁忌の術を使って異世界から召喚された四人の勇者様たち。

本当に不憫ではありますが、彼らを帰還する術は今だ見つかってお

りません。

陛下も尽力しているのですが……全く、神の託宣というのなら神の力とやらでちゃちゃっと帰還なり何なりできないのかしら……あら、いけない。

まあ、神もまさか人の心まで読めないでしょう。

読める？

プライバシーの侵害ですね。神だろうと私たちは一個人なのですからそれくらいのデリカシーはあって然るべきだと思います。普通ありますよね、というか常識ですよ。神なんだから、まさか常識外れなことなざるはずがありません……よね？

ああ……話がずれてしまいました。とにかく、依然として勇者様四人とも我が国に滞在していて、私がお世話させて頂いているんですが………はあ。

この溜め息の意味、分かります？

いい加減、私以外の侍女がついて欲しいんですよ！！

宰相様や侍女長様がどうしても泣いて縋って（ように私には見えしています）いるから私はあの方がたの身の回りを世話していますが、私はいくら優秀な侍女とはいえ一人しかいなんです。つまり、手は二本しかないんですよ。

それなのにあの手のかかるガキ……いえ、失礼。大切な救世主でありお客人である彼らに私一人で相手をするとなると、どうしても手の行き届かない部分が出てきてしまうのです。

元来、私は自分の仕事には責任と我が血にかけた誇りをもって全身

全霊、まさに一足一手に魂をかけて力を尽くしていることを第一にしてきました。

それを今までは姫様にお捧げしてきたのですが…いくら優秀な私もさすがに…きついものがあるのです。

以前はそう言うことを言っていなかった？

ええ、もちろん。本来ならばこのようなことを申すわけもなく勇者様の四人だろうが十人だろうがお世話させて頂くのは造作ありません…おそらく。…やはり十人はいささか言い過ぎたかもしれません。

そう、しかし以前と今では明らかに状況が違うのです。

時とは過ぎ行くもの。不変なものほど限りがあるというのは皆さんご存知でしょう？

例に洩れず、以前と今ではすっかりと私を取り囲む状況は変わってしまったのです。

それはなぜか？

いえいえ、陛下が関わっているわけでも魔王が関わっているわけでも、ましてや勇者様が関わっているわけでもありません…あ、でも少しは関わっていますね。

実は、魔王が退治されたという正式な発表を陛下は諸国の王や貴族と皆で話し合った結果、なさいました。

厳密に言えば魔王はまだ生きていますから退治などはされていないのですが…まあ、そこはいいでしょう。彼らにこてんぱんにのされた魔王は今や療養中の身であるし、何をされたかは知りませんが何やらに怯える様子で今は一切戦闘する気も失せて魔王城に引きこもっているようです。

魔族は魔王には絶対の服従と敬意があります。だから、魔王の敵を――：などというわけでもなく、魔王と共に人間の勇者を恐れて引きこもっているようです。意外と肝っ玉が小さい奴らですよ、魔族も。

おおかた引きこもるほどの精神的ダメージは、シンヤ様が与えたもののようですし：回復するのには時間がかかりそうです。

魔族が人間を襲うようなことは今や全くといっていいほどなく、先日までは今だ人間を襲う残党を陛下や勇者様がたは追い払うのに精力を尽くしていました。ですから、その残党もなくなった今は本当に：私たちが待ち望んでいた平和、なのです。

私も平和は大好きです。

余計な争いの火種なんかがあると、姫様の心痛が病んでしまい肌が荒れたりしてしまいますからね。もちろん、憂い顔の姫様も素敵ではあるのですがやはり第一の侍女としては主君には笑顔でいてほしいものなのです。

：でも、なぜか私の周りは平和とは言い難いですが。

平和なんですよ？一応は。

魔王の進撃に怯えることも、兵士たちが鬼気迫るように訓練をしたり、はたまた絶望に打ちひしがれる民を見ることがありませんし。ただ：：ね。私の周りは：なんかこう：ピリピリしてるんですよ、空気が。

私も理由は分からないんですが、肌で感じるんです。そういう面倒な空気は。

主に陛下と四人の勇者様がたの間にある空気がですが：

陛下は今も勇者様がたを返還する術を模索中です。ただでさえお忙

しいかたですのに、数少ない休憩時間や睡眠時間を使ってまでお探しになられて……本当によくやる……いえ、大変誠実なかたです。ですが、最近分かったのですが、どうやら陛下は夢がおりで、それには四人の勇者様がたを返さないと叶わないらしいのです。

「早くあやつらを返さねば、私の夢が叶わんではないか……」

と、言っているのを私は偶然聞いてしまいました。
夢って何かしら??

まさかの世界征服?……でもそれはありませんね。私の見立てからしても陛下の誠実さは並大抵のものではありませんから。

素晴らしいかたですよ、陛下は。そんな陛下の妹君である姫様も私が仕えるのに申し分ないかたですから……侍女冥利に尽きますよね。

後は陛下が后、または妾妃でもいいので御子を作りになられるのだけが目下の心配事ですね……はあ。陛下もぐずぐずしないで片思いを両思いになさる努力をするなり、諦めるなりしたらよろしいのに。姫様の団長様へのアタックを見せてあげたいです。

女性のいざとなった時の度量はとてつもないんですよ?

……と、少し話がずれてしまいましたね。

さて魔王の脅威がかなり和らいだ今、隣国から舞踏会の招待状が届いたのです。

気が早いなあ……と思いましたが、隣国の王子といえば良く言えば前向きで悪く言えば脳天気なかたでして……魔王が消滅したわけではあ

りませんが、実際は消滅したのも同然の今、そのお祝いをしよう…とのことです。

まあ、王族が率先してそのような祝い事を行えば民も安心するかもしれない。

ですから、陛下も十分な考慮を重ねた結果、その招待状を受けることにしたのです。

そう！そこで私の憂いがあるのです！

第一侍女としての最大の見せ場、姫様のドレスやアクセサリ、髪型の至るところまで厳選に厳選をしつくして姫様に着飾って頂くのです！！

招待状を頂いて一ヶ月後には舞踏会。

それまでに仕立てや屋とも話し合いをしなければならぬのに…私の時間が足りないのです。

四人の勇者様も舞踏会に参加らしく、お針子に任せているのですが何故か彼らは私も一緒に決めて欲しいなど駄々をこね…！！私は姫様につきつきりになれないのですよ。

ああ……もう！！

第一の侍女として他の侍女に任せることなんて考えられない！

姫様の魅力を最大限に引き出せるのは私だというのにつ。

「お願いですから皆さん…私はこれから姫様の採寸をしなければならぬので…」

もう呼ばないで下さい。

そう続けようとなりましたが…

「は？ 姫様だかの侍女はたくさんいんだろ？ 別にラシエルが行かなくてもいいだろ」

だから……っ！！

私は姫様の優秀な（ここ重要です！）筆頭第一侍女なんですよ？ 私が行かずして誰が行くというのです。

「ラシエルさんは働きすぎだよ？ もう少し身体を休めたほうがいいんじゃないかな。ほら、新しいケーキ焼いたんだよ」

ああ…素敵に甘いお…って、一体誰のせいでこのように忙しいのか分かっていらっやらないのかしら…。

あ・な・た・た・ち！ ですよ？ 休みが必要だと思えば、私ではない侍女をお呼びになればいいものを。

「だいたい、姫君のドレスなどたくさんあるでしょうに。何か催しがあるたびに服を新調しなければ気が済まないんですか。…全く金、いや税金の無駄遣いですね」

いっておきますが、貴方の世話をしている費用も国の国庫：つまり税金ですからね？

それに、私の姫様をそこらへんの金の価値すら分らない馬鹿女たちと一緒にしないで頂きたいです。姫様がみすばらしい格好をしてしまつては、他国への無礼どころか他国が我が国を侮る原因にもなりえるのですよ。

ですから、姫様が洩ろうとも今は新調し、我が国の権威を見せなければならぬのです：それに、姫様をお可愛らしいから色々と着せてみたく：ごほごほ。

これは決して、無駄遣いではないのですよ？

「ラシエルはドレス、着ないのか？」

は???

私は侍女ですよ？いくら国一番の優秀な筆頭第一侍女とはいえ、侍女は侍女。そのような格好をするわけないでしょう。

私はあまりに突拍子もないことを言っている、と驚いてしまったのですが、なぜ皆さんこちらをじっと見つめていらっしゃいます。え？何ですか、その目は。

私は不思議に思いながらも、着ない旨を伝えると今度は皆さん一様に溜め息をおつきになりました。

「……チツ、んだよ……つまらねえな」

「本当にねー…」

「まあ、予想の範囲内ではありますけど」

「……………ハア」

一気に重苦しい空気が辺りに満ちて…ああ、空気の入れ換えをしなくては。

でも、なぜいきなりそんなことを気にするのかしら…？

……うーん…、あ、まさか…っ。皆さん、私が似合わないドレスを着ているところを見てお笑いになるつもりですね！？

失礼な！…と、言いたいところですが、私自身も私がドレスなんていう超高級品を身に纏うなんて分不相応なことしたら、恥ずかしさを通り越して笑いが起きますよ。

私がドレス？……ぷくく、なんて似合わない…ああ、これ以上やると私にも少しダメージができますよね、やめましょう。

私はあのお美しい私の姫様に着て頂けるドレスを選び、それを着た姫様をそれはもう十二分に引き立て、世の殿方たちをメロメロにすることが楽しいのです。これであの堅物な近衛団長も少しは焦るでしょう。

ふふ、焦りなさい。私の姫様にあそこまで一途に想われながら自分からはなかなか行動を起こさない軟弱な精神を切り捨ててしまいなさい！！

ですが、まずは交際の基本は庭の散歩からですよ？

姫様は純粹培養でいらっしやいますからね、ゆつくりと愛を確かめ、育みあうのが良いでしょうし。

まあ、あの近衛団長ならば心配無用ですけど。だって、女性経験が少な……げふん、げふん。

これは、いくら優秀な私でも口にしてはいけませんね。善処致します。

あー…あと、また来るのかしらね、あれ。

あれとは何かって？

あれはあれです。陛下からの姫様への贈り物です。

姫様がお年頃になられてからかしら。陛下は姫様にそれはもう、きらびやかなドレスを贈ってくるのですよ。さすが陛下というか…そのセンスたるや一国の主に相応しい。

あまり着飾ることを好まない姫様に合わせて、キラキラと無駄に付いた飾りを全て排除したシンプルなドレスは、それでも一流の素材と刺繍技術をふんだんに使われた素晴らしいもの…。

私もその素晴らしさには思わずうっとりしてしまうものばかり。

初めは、私たち侍女への挑戦かと思いましたが。

お前たちはこれくらいこのドレスをも姫様に用意できないのか？と言われているかのようで…。ですから、一時期は陛下をいつい睨んでしまいました…ふふふ、これはもう時効ですよ？陛下…一国の主を睨むなんてことをしてしまえば、私は怒られるどころではありませんから。

今は、純粹に陛下の姫様への麗しい兄妹愛に微笑むばかりで、嫉妬などあるはずありません。

ただ、姫様はそのドレスを一度も着たことがないのです。

シンヤ様ではありませんが……さすがに私もこれには毎回もったいないとは思うのです。ですから、姫様に何度か進言致しましたが姫様は困った顔をして首を横に振るばかり……。

せめて、陛下と三日に一度なさる茶会の時にでも着てみてはどうかと申し上げましたが、なぜか私に着てみてはどうかとおっしゃるのですよ！

私が着ては意味がありません！！と申し上げても姫様は決して袖を通そうとしないのです。あげく、姫様は私の部屋（姫様の第一侍女である私の部屋はすぐ姫様のもとへ駆け付けられるよう、姫様の部屋の一室を与えられているのです）のクローゼットに入れておいてくれ、とお頼みになるのです。

「ラシエルがいつ着てみても構いませんから……あ、いえ、着てみたら、わたくしに見せて下さる？ラシエルならきつと似合うと思うの」

姫様！私に対しての嫌がらせですか、それは！！

い、いえ……姫様に限ってそれはないと思うのですが……。

ドレスを贈られた後、陛下が物言いたげに私をチラチラ見るあの視線がいたたまれないのですよ……！！

陛下……すみません。いくら優秀な第一侍女とはいえ、さすがに主には逆らえません。

姫様に着て頂きたいのなら、この際陛下がきっぱりとおっしゃって下さい。応援致します。

そういえば、陛下は片思いのお相手に贈り物をなさらないのかしら。

贈り物を贈るといふのは愛情表現にも等しいものです。
陛下がなかなか口で想いを伝えられないのなら、贈り物をすべきだ
と私は思いますよ。

侍女の独白く招待状2く

やっぱり今回も陛下から来ましたよ、ドレスが。

今回はアクアブルーを基調とした滑らかなほっそりとしたデザイン
のドレスでございました。裾の透かし模様の部分は細かく、肩をガ
バツと開かせたござっぱりしたもので、姫様の麗しいうなじを出せ
ばどれほどの殿方が姫様の美しさや可憐さにほだされるか想像に難
くはありません。（もちろん、あの団長様はやきもきなさること間
違いないです。ざまあみなさい）けれども…ふむ…、なかなか素晴
らしいデザインではあると思いますが、私としては姫様に似合うの
は寒色系よりも暖色系だと思うのです。アクアブルーは私の好きな
色ではありますが、やはりそこは納得できないですね。

姫様のことに關しては、妥協という二文字は抹殺対象となりますの
で…悪しからず。

さらされた首元につけるのは小さな花飾りがついたチョーカーでも
良さそうですね、と考えつつ、姫様にどの衣装を身につけなさるか
を尋ねました。

姫様は迷う余地もなく陛下のドレスでなく、私たちが用意したドレ
スをお選び下さいました。

うふふ…ふ、ははは！

陛下、私が数々してやられた陛下のセンスも色を間違えてしまった
のが誤算でしたね。

勝ちました！私たち侍女の試行錯誤ゆえに会議と会議を重ねたドレ
スが見事…陛下のドレスに打ち勝ちましたよ！

…と、遊びは程々にいたしましょう。

とりあえず姫様のドレスは決定いたしました。後は細かい飾り付け

ですね。

姫様の長い、くると自然にカールされた髪は触り心地が抜群でして…そのまま垂らすのも素敵ではありますが、やはりここはイブニングドレスですので姫様の麗しいうなじを見せつけてやりましょうか…。

ああ、もっと時間が欲しいです。そしたら様々な髪型、髪飾りを駆使して姫様に最も似合うのを用意いたしましたのに！！

くっ…しかし妥協は許せない。こうなったら、私の優秀な第一侍女としての能力を最大限に発揮させて頂こうではありませんか。

コキコキ…指を鳴らして…あら、怖いなんてそんな…気のせいですよ、ねえ？

…さあ、始めますわよ！！

「なあ、ラシエル」

ああ！！もう、一体何なのですか！？思わず恨みのこもった目線をしてしまいますが、はっ！と気付いた時にはまさに後の祭り。何と陛下でしたよ、陛下。今は舞踏会に向けてやらなければならないことはたくさんあったはずなのに。まさか…サボり？いえいえ、まさか、ね？陛下に限ってサボりなんて…いえ、あるかもしれせんね。何せ姫様はサボり…いえ、ご休憩をよく自分一人でお取りになるほど自由なかと。その兄君である陛下ならばその片鱗くらいはあっても不思議ではありません。

しかし、陛下を睨みつけるなどと…はあ。優秀な侍女たる私からすれば、何という失態でしょう。いくら苛立ってはいたとしても、陛下の気配くらい読んで当然でしたのに……しょぼん。

「どうなさいましたか、陛下」

「あ、ああ…その、ラシエル…お前は…、舞踏会に行くか」

視線を下にさ迷わせてモジモジと指を弄ぶ陛下……

…全く、何を馬鹿なことをおっしゃっているのか。

私は姫様の第一侍女ですよ？舞踏会に行くに決まっているじゃないですか。陛下、失礼ですが忙しさのあまりにぼけてしまわれたのですか？

え？違う？

私自身が舞踏会に出るつもりなのかと？

いえいえ…それこそそんな分かりきったことがありますか。私がいくら優秀であるとしても一介の侍女であることには変わりませんよ。皆さんのように招待されたわけでもないのに、参加できるわけがないでしょう。もし参加できたとしても私は貴族の男と女の気まぐれや自分自慢、傲慢なプライドの見せびらかしなどがはびこる舞踏会に興味なんてありませんけどね。

むしろ招待しないで頂きないです。面倒ですし。

でも、それを正直に陛下に告げることはしませんよ。

婉曲に、当たり障りなく…と考えられるのも私の務めですからね。

「私は姫様の侍女ですから、舞踏会に出席させて頂けるような身分

ではありませんので」

「いや…実は、今回の舞踏会は身分など関係なく招待された者、またはその付き添いも参加できるようだな…」

まあ、それは初耳でしたわ。

そんなに派手なことをして国庫のほうは大丈夫なのかしら……まあ、私の国ではないのだからどうでもよろしいですけど。

「だから、だな。…その、たまにはお前も侍女という仕事ばかりではなく楽しんでは…どうかと思うのだが…。お前も、仕事ばかりで疲れているのではないか？」

「お心遣い感謝致します、陛下。ですが、私にとっては姫様にお仕えすることが至上の喜びであり、私の楽しみでもあります。疲れなど感じたことなどありません」

予想外の仕事が増えたりはしましたがね。

あの方たちの世話は…正直言うところ疲れを感じる時もありますがそれも私の侍女としての試練だと思えば、楽しくもありますしまだまだ余裕があるくらいですし。

陛下は、そうか。と頷いて下さいましたけど、何か…そう、齒に物

が詰まったような顔をなさっていました。

何か他に伝えたいことでもあるのかしら？と首を傾げたところで、宰相様が陛下を探していらしに来ました。

宰相様は30代で陛下よりも年上ではありますが、歴代でもお若く、聡明な宰相様として有名です。確かに聡明で、あーんなやこーんな策略を巡らしますのに普段は穏やかなかたです。

宰相様は夕焼け色に染まった赤茶の髪を襟足の部分だけ少し伸ばし、少々浅黒い肌と琥珀色の瞳をしており、随分と色気のあるお姿。

陛下、神官様に続いて侍女内イイ男ランキング上位入りを果たす常連さんでもあります。

身分も地位も上のかたは容姿や纏う雰囲気すらトップレベルなのかしら…何やら差別的なものを感じますね。

ふん…、人が生まれながらにして平等などというのは幻であり自らを惑わす甘言であることはもう私にはごまかせない事実だとはつきり見えておりますよ。

宰相様はどうやら陛下にご立腹のよう。人通りがないとはいえ廊下で、仮にも臣下である宰相様が陛下に苦言をグチグチと垂れる様は…一国を預かる主の身としては避けたいですよね。

ちらちらと気にするように私を見る陛下に、心得ましたとサインを送りました。

宰相様と陛下に完璧な姿勢で礼をしてその場を去ることにし、なるべく廊下に人が寄り付かないように致しますね？

ご安心下さい、陛下。

「ちょ…っ、ラシエル、どこへ…っ！…!話はまだ……」

その後、執務室に戻った陛下の顔はたいそう不機嫌でいらしたと侍女に聞いた私は、今度宰相様に陛下をお叱りになる時は廊下ではなく部屋でするように進言しようと決めました。

ああ、忙しい。

招待状の日まであと少しばかり。衣装もだいぶ用意できてきましたので、後は数日の滞在期間に必要なものを揃えなくてはなりませんね。

「なあ、ラシエル。俺のピアス知らね？片方が見当たらねーんだけどさあ」

「ピアスでしたら、あの棚の上に置いておきました」

「ラシエルさん、隣国ってどれくらいいるの？おやつとか何円くらいが予算かな」

「二、三日程度でしょうか。衣類はこちらで用意させていただきます。…予算？お菓子は自由に持って行って構わないと思います、あち

らの国であちらのお菓子を食べてみるのも楽しいですよ」

「面倒臭いですね…、このまま城にいるのは駄目なんですか？」

「面倒なのは申し訳ないと思いますが、これも皆様がたが魔王の力を無にして下さったおかげの結果です。その結果を出した張本人がいなくては意味を成さないでしょう」

「……………眠い」

「あと少しで夕食の時間ですから、寝るのならその後にしてください」

忙しすぎでしょう！！！！

勇者様がたは好き勝手にしていますが、私はもう……………はっ！！いえいえ、これくらいでへこたれてはいけません。

侍女の中の侍女たる試練と思えば、こんなの楽勝すぎて笑いも起きないくらいですし。

…と、こんなことしている場合ではありません。

勇者様たちにはきちんとお伝えしなければいけないことがあります。た。

「「「ダンス??」」」」

「はい、勇者様たちには舞踏会で必須のダンスレッスンを始めて頂きます」

はああああ!!?」

と、唸る勇者様がたを尻目に私は素早くダンスの名手として名高いグリードレフィズ候爵様とその妻のノエア様をお呼びいたしました。グリードレフィズ候爵様は、ご結婚前は大層浮名を流しておられたプレイボーイ（勇者様がたの言葉はなかなか面白いものばかりです。妙に的を得ているというか…）でありますが、妻であるノエア様にお会いしてからというもの、その名はすっかりなりを潜め、今では社交界きつての鴛鷹夫婦おしどりとして有名なのです。

ノエア様というと、容姿は厳しいことを言いますと際立った華やかなものではないのですが、そのおっとりとした柔らかな雰囲気をお持ちのかたで陽射しのような暖かい微笑みをいつも浮かべていらっしゃる素敵な女性です。侍女仲間から話を伺うに、おしとやかで様々な女性に見えますが実は意外にたおやかで豪胆な部分があるようです。

でも、それには納得ですよ。ただのしおらしいだけの女性が、あれほどの浮名を流していた候爵様を捕まえられるはずがありませんし。

見た目は野に咲く花のようなかたでも、中は屈強な武人くらいでないとやっていけませんよ。

いい女、つまり魅せる女、芯のある女とはそういうものです。

皆さん、心に留めておいて損はありませんよ？

さあて……と、

「皆さん、準備は整いましたか？」

「「「いや、無理!!」「」「」

今まで準備する時間を設けていたというのに、一体なにをしていたのでしょ…。

さっさと準備をして頂かないと、びっちり分や秒単位で刻んである予定が狂ってしまいますのに…!

ぶつぶつ文句を言ってらっしゃいますが却下。

勇者なのにこのような扱いでいいのか、ですか？

ええ、確かに御四方とも私たちの世界を救って下さった救世主であることには変わりません。それには感謝してもしきれない恩を感じておりますよ。

…でも、これとそれとは話が別です。いくら勇者様だからといって、飾り立て、甘やかすなんてことはいたしません。

それに、舞踏会では勇者様がたは主役となるのですから、ダンスの一つや二つを身につけておかねば相手のお嬢様にも失礼ですし、何より皆さんが恥をかいてしまいます。

私が直々にお世話をさして頂いているのに、まさか恥をかきそうな要因をそのままにしておくわけにはいきません。

全てを万全に、完璧に、不安要素を余すところなく根こそぎ排除してから参りませんと…!

ですから…、さくさく踊っていただきますよ？

洩々、候爵様からステップを教わる皆さんを見、大満足とまではいきませんが上々です。

アオイ様は少々ぎこちなくはありますが、初めてだというわりには素晴らしい出来だと候爵様が褒めていらっしやいました。

トオル様の動きは大変優雅なのですが表情が…無表情すぎるというのも時に…控えるべきでしょうね。

ですが、お二人ともあと少しだけ練習なされば恥ずかしくないどころか、立派な紳士としてレディをエスコートし、ダンスに誘えそうです。良かった。

……あとは…

「サクト様、そこは右にターンです。いい加減に覚えて下さい。頭ではなくリズムで覚えるのです」

「わかってるっ……うお、み、みぎ…つぎ、次…左！？げっ、ちげえし！！！」

あたふたと候爵様の見様見真似を繰り返そうとするサクト様。リズムにはのっているのですが、力が入りすぎてしまっていて、かつ、間違いが多過ぎです。覚えるのは苦手だと言っていたのは聞いていました…ここまで間違われると違うステップが出来上がりそ

うですね。

でも、それも全ては練習次第。

サクト様もこれから練習を重ねていけば身体が自然とリズムとステップを覚えてしまうものですし、大丈夫そうです。

……あと一人は……と、

「シンヤ様…その動き…」

「…何も言わないでいただけますか。今、集中しているので」

うーん…

何と申し上げたらいいのか…この動き…というより、足踏みとか…うーん…

「伸夜、ロボットみたいだよ」

あはは、と笑うながらステップを踏むアオイ様をシンヤ様はジロリと睨みつけました。

突き刺さる殺気にもアオイ様は動揺も怯えもなくただニコニコと微笑んでいるだけです。

…アオイ様、強い。

ビシビシと不穏な空気が二人を中心に広がっていきますが：今はそういう時ではございませんしね。

「シンヤ様、少し肩に力が入りすぎです。：少しお手を：いいですか、ワン、ツー：そこでターンです」

仕方ありませんから、私が実践的に教えて差し上げましょう。

シンヤ様の身長は少しばかり高めなので、ヒールを履いていない私からしたら肩が少し上の位置にあるのですが今はステップの確認ですから：見栄えのほうは後からで良いでしょう。

ワン、ツー、と口で指示しながら踊りきると、シンヤ様は頬を若干染めて口元を覆っていました。

「：ありがとうございます、ラシエル。だいたいのコツが分かりました」

「それは良かったです。流れに任せ、大胆にステップを踏めばそれなりに美しく見えますよ。力を入りすぎては逆にぎこちなくなってしまうからです」

「そうですね、分かりました。ところでラシエル：これから一緒に踊ってくれませんか？まだまだ分からないことも多くあるので：

「「「ちょっと待った!!」」」

いつの間にか三人とも近くにいらっしやってました。

それに：先程よりも不穏な空気が増しているような気がします。ちらりと候爵夫妻を見ると……二人の世界ですね、はい。失礼いたしました。

「ラシエル、次は俺と踊ろうぜ。俺も全然ステップが分からなくてさー……」

「次は僕と一緒に踊ってくれない？ラシエルさんと合わせたほうが本番もよりうまくできると思うしー……」

「ラシエル、来て」

「：貴方たちは自分でやっていればいいでしょう？こちらに來ないでいただきたいんですがね」

バチバチと飛び散る火花。

そして、こことは異なるピンク色ムードが漂うお二人。一つの部屋で天と地ほども違うオーラ。

「……疲れました」

時間も押してますから、私はさっさと退散することにしたしまし
う。

次は姫様の御髪を整えなくてはなりませんからね。

兵士Aの独白

こんにちは。

僕の名前は…と、こんな自己紹介をしても意味がないと思うからやめておくとしよう。（独白といえば、ただの独り言ってことだからね）

僕の両親が小さな村で農作業を営んでいる。兄弟も十人くらいいる大家族のちょうど5男坊の僕は村の中で初めて王宮の騎士として城にあがれることになった。

自慢かって？…まあ、自慢したくはなるけどおいておくよ。自分の幸せが何かは自分で決めることだからね。僕の上の兄さんたちは皆結婚して家庭をつくりながら農夫せつせと桑や鋤を耕して生活している。それはそれで楽しいと僕は思うんだ。だって、人を傷つけたり、人の死と隣り合わせ…なんて生活にはなってないしさ。そりゃ、僕も騎士であることに誇りは持ってるよ。数ある魔物たちから大切な家族や友人を守りたくて、必死に騎士を目指したんだから。まあ…今はそんな脅威も薄らいで平和と呼べる生活をしているけど。それもこれも皆、異世界から呼び出された勇者様がたのおかげだよね！うん…、おかげだよ、うん…。

なんか反応が微妙だった？

いやいや、まさか！僕はね、ほら、やっぱり魔物なんて規格外なものとか戦っても華々しく死ぬだけだし！というか、むしろ死ぬ以外の選択肢がもともとないくらいだし！

だから勇者様がたが魔物を倒してくれたことは、万々歳！

これで先輩や友達が死地に旅立つのを齒痒い気持ちで見る必要がなくなるからね。

やっぱりあれは辛いよ…

赴任先が決まって、その魔物出没率が高いほど死ぬ確率が増えていくんだし。僕の友達も何人か赴任して…結局…だったからね。

いや、うん…なんかごめん。

暗い感じになっちゃって…

僕、あの時の友達の顔とか今だに忘れられなくてさ…。僕らもそれを覚悟してなった騎士を目指していたわけだけど、それでも語るのと経験するのとても全然違うし…。

正直言うと、もう少し早く勇者様がたが来てくれたらなってよく思うんだ。そしたら皆死ななかったわけだし、何よりもこれだけの被害を早めに抑えられたんだろうって思えるから。

…まあ、それも今となって言えることだけだね。

それに勇者様たちのおかげで、これから消えようとしていた幾つもの命や、彼らが死んでも守りたいって思ってた人たちを守れたんだから、彼らもきつとすごく満足していると思う…。

そんなわけで今ではすっかりお祝いモード。

魔族の脅威は去ったけど、いつ何時として国に危機が訪れるかわからない。だから気を緩めずに騎士鍛練を続けようと思うんだけど…

「今日も飲みに行くぞー！」

「「「おーっ！！」「」」」

…すっかりお祝いムードな今日この頃。

それだけ今までがピリピリしてたから、その反動だとは思っただけど…副隊長。はっちゃけすぎです。

貴方、今日で飲みに行くの何回目ですか。

軽く両手で数えても足りないくらい行ってますよ…。

僕も初めは嬉しくて仕方なくて副隊長に連れられて先輩や同僚たちと飲みに行ったりしたけど…副隊長、気付きましょう。

後ろで静かに素振りをしていらっしやる隊長の眉が眉間に寄られていることを…！

我等、騎士たちが誇る隊長はまさに騎士として懂れてしまうほどの御方。少々筋肉質すぎる部分もありますが、男の僕でさえ見上げてしまう身長と、歴戦を勝ち抜いた者にだけ与えられるというその覇気には敬服するしかありません！

左眉に若干の傷痕が残って、それが厳めしい顔をさらに厳つくしているけれど、そんなのは問題なし。男たる僕からしたらそれすらも隊長の魅力に思えます…怖いけど。

いやいや、そりゃね！？僕はまだまだ新人騎士だから隊長ほど別格の御方は畏れ敬う対象だからね！？怖いっていうか、まあ顔も少し…すこおーし怖いんだけど、仕方ないでしょう！？

練習の一貫として隊長と対峙した時の凄みや気迫が、あまりに怖くてしばし夜中に悪夢にうなされていたのはつい最近のことでもあるんだから！（泣）

とにかく隊長のその気概は見惚れるけど、それに加えた仏頂面（無表情ともとれる）、鋭い眼光。

…ちびりますよ、はい。

そんな隊長が睨んでいらっしやるんですよ！？副隊長、貴方にはその眼光の意味が分かりますか…！！

遊び大好き☆な副隊長とは違い、隊長は超がつくほど堅物で真面目な御方。

だから、練習中に飲みに行く算段をしている我々に業を煮やしてるに違いありません！

ああ…！ほら！

隊長が眉間に寄せた眉をピクピクしていらっしやるうううう！！
副隊長！そろそろ仕事に戻ったほうがいいかと！
歓楽街の案内は分かりましたから！いい店探しておきますから！いい娘紹介しますから！！

隊長が素振りを終えて、ズシ、ズシという効果音と共にこちらへ：もとい、浮かれる副隊長の元へと歩んでいかれ：っ！

「あ：姫様」

誰かが呟いたその一言。

隊長の身体がビシリ、と凍りついたように動かなくなりました。

：良かった。副隊長、貴方はほとほと運がよろしいですね。

皆はもう知っているかな？

我が敬愛する陛下の妹君にして、至高の姫君。

陛下とよく似た輝かしい太陽のような髪色をし、空よりも澄んだ瞳をお持ちになる陽だまりのように優しく麗しい姫。

彼の姫君に憧れている騎士など星の数ほどいて、もちろん僕も例外じゃない。

兄である陛下と同じような容姿なのに、姫はほんわかとした春の陽射しを思わせ、陛下は夏のサンサンと輝く太陽を思わせる。似て異なる兄妹は、我が国の大切な宝。

その宝を身近で守れる身になれたことは本当に幸運としかいいようがない。

大袈裟に言い過ぎだ、って？

ふっ、そんなことを言う奴がいたら僕：ちよおつと理解ができないな☆

姫君は本当に可愛くて綺麗で：僕みたいな田舎者からしたら雲上人。騎士になれなかったら一生会うことはなかった。だから、騎士になって本当に良かった！ってこういう時に思わずにはいられないよね！ほら、それにさ、よく言うじゃん？騎士と姫君、身分違いの恋物語り：みたいな。

そんな巷ちまたでしか流行しなさそうな物語、現実と夢とは違うから実現するなんてまずありえない！：とは思っただけど：まあ、騎士になりたてはやや君だったら、期待しないと思いつつ期待するんだよなあ：。本当、馬鹿：。

それに例え夢は夢でも、姫君はもう予約済み：っていったら不敬かもしれないけど既に相手が決まっている。

それが驚くべきことに：あの、笑う子が泣きわめく形相をおもちの隊長なんすよね！。

……なぜ？

あ、あ、いやいやいや！別にそんな隊長羨ましいーとか、裏組織も裸足で逃げ出しちゃいそうな怖面の隊長に何であんな可愛いを体現したような姫君が惚れてんのーとか、とか、とか：思ってるわけじゃ：……ないですって！

並ぶ姿がどでかい野生熊と仔ウサギちゃん：のようなそうでないよ
うな、でもやっぱりそうであるような感じではあるけど！！

世の中ってのは全くもって不可思議だ。うん、人生決まりきったことなんてあるわけないんだ。それが重々分かりましたよ。

物語のような話みたいではあるけど、まさに騎士と姫の恋物語。：とある副隊長が言うには、野獣と美女の奇跡の物語だとか：いや、僕が言ったんじゃないよ？あの副隊長だからね？

と、まあ：外観的には色々と問題があるお二方ではあるけど、ほのぼのの初々しいピンクオーラは正直、僕たちのような男世帯の騎士団にとっては目の毒、耳の毒、鼻の毒。てか、全てが毒！！

初々しいのはいいけど、だだ漏れラブコメモードは止めて下さい！
隊長！！

ぶっちゃけ辛いです！

色んな意味で辛いです！！

初めは脇腹が痛かったんですが、最近では心が痛いんでマジ止めて下さい！いちやいちやは二人っきりの時にお願います！

初々しいカップルの恋模様は周りから見るとなかなかにじれったい。しかも、肉食野獣みたいな顔をして（僕じゃないから！某副隊長が言っただけだから！）隊長は女性に関しては無頓着かつへたれだ。だから、ほとんどが意外と積極的な姫君のアプローチで、亀よりもさらに遅い速さで恋は順調に育ってきている。

僕が騎士団に入る前から続いているらしいから、かれこれどのくらい続いているのかはよく分からない。

けれど、一言言うなら：

羨ましいです、隊長。マジでコンチクショーなんですけど、隊長。今日も今日とて姫君は隊長にアプローチ中。あんな美少女に応援されるなんて：はあ、僕も応援されてみたいよ、本当。

あ、でも実は僕らにとっては姫様の御顔をちゃっかり拝顔できるチャンスと同時に、騎士団の中ではもう一人、別のチャンスの狙っている輩が数多くいる。

それが、姫君の第一侍女のラシエルさんだ。

本当は僕のほうが年上ではあるらしいけど、ラシエルさんは僕より長く城で姫君に仕えているし、何より纏う空気とかオーラ？が近寄り難い感じがして、気安く呼びすてやちゃん付けができない今日このごろ。

僕はへたれではないからね？

へたれは隊長だからね？：あ、これ僕が言っただのは内緒だから！！

と、話は戻すけど、ラシエルさんは姫君に負けないくらいの美少女：って訳でないけど印象的な、どこか惹かれてしまう要素がある可

愛い少女だ。

印象的、っていうのはやっぱりラシエルさんの髪色や瞳にある。ラシエルさんは堇色すみれの、透き通るような紫色の髪をいつも後ろ頭で引っ詰めていて、瞳は光の加減によって青にも緑にも見える綺麗な碧色をしている。ほっそりと肢体にも関わらず、スタイル抜群で（ここ重要！）物腰の柔らかさと静かな佇まい、そして無口とも取れる寡黙さが騎士団にいる男たちにとってはツボになるらしい。

ラシエルさんのファンは騎士団だけに限らず、城仕えする侍従や貴族たちにもいるらしくて、敵はかなり多い。

だけどラシエルさん自体に恋人がいるという噂や話もないから、諦める男たちは今のところはいないらしい。

そう、今のところは…だけどね。

何が言いたいかって？

そんなの、見ればすぐわかるよ。

まずは…

「陛下もお見えになったようだぞ」

「本当だ。相変わらずよく剣の稽古にいらっしゃるな。稽古をつけなくても、あれだけ強いのにさ」

呑気にそんなことを言う同僚たちだけど、僕は違う。

ちゃんと分かっている…なぜ陛下が剣の稽古にいらっしゃるのか。

それは何を隠そう、陛下はラシエルさんがいるから剣の稽古をしにいらっしゃるんだ。

ほら、好きな子には自分の良いところを見てもらいたかったりする

だろ？それだよ、それ。陛下のはまさにそんな思春期を迎えた少年のひたむきな恋への努力。

あー…自分で言ってる背中がぞわっとした！思春期を迎えた少年て！陛下は御年25年になれるのに！いや、まあ純情少年みたいな陛下もカッコイイけど！！

とにかく、陛下がラシエルさんを好いているのは僕からしたら一目瞭然で、姫君が隊長の練習風景を見に来る時間になるといつも陛下が現れる。

姫君の侍女であるラシエルさんもその時、姫君と一緒に僕たちの稽古を見に来るからだ。

陛下は王太子殿下でいらした時には、この騎士団の隊長をしていらつかった実績をもち（今の隊長はその時に副隊長だった）、さらには国政にも民のために常に尽力を尽くされていた素晴らしい方。文武両道とはまさにこの事。

それに加えて容姿の美しさなど、…言わずもがなだ。

そんな陛下だからこそ、他国やこの国の貴族たちからも縁談や結婚の催促など多々あるのだが、陛下は今だ独身。

これが意味することはただ一つ。陛下はラシエルさんを妻に迎えようと今、必死に求愛中なのだ。

確かに身分差という問題もあるが、もともと身分に特別うるさいのは名高い貴族たちだけで王家自身は、民の中から王妃を娶った王もいらつしかったくらいだからそこまで身分にこだわりの持っていないようだ。

だから、後は陛下がラシエルさんに求愛し、結婚の承諾をまとめれば後は全てがトントントン拍子で行くだろう……はずだった。

なぜ、はずなのか。

それはもうこれまたあの勇者様たちがいるからだ。

魔王を倒してくれた、異世界の勇者様たち。そりゃ、僕たちの都合で呼び出して、魔王を倒したら、はいサヨナラなんて非道なことは

言えないけどね。

僕がみる限り、あの勇者様たちの、しかも四人ともがラシエルさんを好いている。

ラシエルさん人気だからなあ…僕はちよつと怖いけど。

勇者様たちも陛下に負けず劣らず…とも言いたくはないけど、陛下の楽勝とは言い難いほどの容姿端麗、そして魔王を倒すほど神の恩恵を受けた力をもつ方々…。ぶっちゃけラシエルさんのほうが隊長と姫君の恋物語よりすごい物語ができあがりそうだ。

と、いうわけで魔王を倒し、だけど元いた世界に帰れないという勇者様がたは今はこの国で庇護していて、王宮で暮らしている。時折、冒険者（勇者様たちが新しく作り出した職業）として、魔王に侵略されていた際に魔界から移り住んできた魔物たちの討伐に出かけ、そこで魔物の皮を剥いで、新しい武器を作るようにと武器職人に渡しているらしい。これがまた民にまで広まり、今や冒険者はうなぎ登りの人気を誇る職業として認知されるようになってきた。これがまた新たな国の財源となり、魔物により行き場をなくした者たちへ救済にもなっているのだが…勇者様への借りは今やこの国には返し切れないものがある。

だから、陛下も勇者様たちがラシエルさんを好いていると分かっているけど、いかに勇者様を追いついて出したりできないらしい…と、副隊長が言っていた気がする。

うん、我らが偉大な陛下は公明正大でいらっしやるからなあ…あ、勇者様たちまで稽古に来たから仏頂面してるけど。

勇者様たちも互いに牽制しあい、かつ陛下や他にもいるラシエルさんファンを威嚇するのに遠慮をする気はないらしい。

でも、でもさ？

僕が一番思うことだけど：

ラシエルさん、全然そのことに気付いてないよね？

気付いてないどころか：陛下も勇者様がたも視界に入っていないように感じるんだけど：！！

今も勇者様や陛下が騎士たちに囲まれながら、切り捨ては投げ、切り捨ては投げ、を繰り返しているのに、その方向をちっとも見てやしない！（ちなみに僕は四人の勇者様たちの一人であるアオイさんに切り捨てられた）

陛下、そんなに期待した目で見てもダメですって！ラシエルさん、姫君と談笑してて全然こっち見てませんし！！

ラシエルさんも、ちらりと視線を投げかけたりはするけど（姫君に指で示された方向を見ているだけにすぎない感じだけど）、一切興味なさそう！

仕方なく見てる感じ丸出し！

僕だったら全然見てないってのがわかると諦めちゃうけど、陛下はもちろん勇者様がたも諦めずに自分の勇姿を披露している。それに付き合わされる僕らが1番の被害者となっているのは気のせいじゃないよね：？（次はトオルさんに切り捨てられた：すごく痛い）

そんなこんなで練習用メニューなんて軽く越えた超スパルタメニューをくらって、また明日もボロボロになっていることだろう：…：今なら魔物を倒せる気がする。

僕たちがあらかた切り捨てられると、次は隊長が陛下に切り結んで行って、切り捨てたり切り捨てられたり：…：しかし、この時に実は練習とは言えない本気のバトルを繰り広げられていることを僕らは知っている。なぜなら姫君は隊長の勇姿を見るためだけにここにいらっしやって、さらには隊長も姫君には良い姿をみせたい。これだけならまだいいが：姫君が隊長に視線を向けるということはつまり：ラシエルさんも姫君と同じように視線をそちらに向けるということ！：…と、いうことは隊長と戦っている陛下の姿もラシエルさんの

視界には入ってるはずで…！

好いた女に、自分の勝ち姿を見せたい恋する男が二人…これはもう本気と本気の勝負になるより仕方ない。

しかも、だ。ここには恋する男が他に四人いるわけで……

…大乱闘と化すのは必須だよね。

ほとんど揉みくちやになりながら、戦いをつづける恋する男6名。

…魔王倒すぞ、って訓練していた時よりも必死ですよ、隊長。

6人の男たちが必死に自己アピールをする中で、姫君はもちろん隊長しか見ていない。ラシエルさんかというと…

…欠伸してるし…！！

剣を振り上げながら戦う（模擬実戦だから真剣ではないけどね！）恋する男たちを見て思う…。

陛下、勇者様、

ラシエルさんを落とすのは魔王攻略より難しいと思われます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4072t/>

とある侍女の独白ーReverseー

2011年8月12日00時37分発行